

Movin' Suita 2009.07

現在宇宙で活躍中の人工衛星・まいど1号



東大阪宇宙開発協同組合理事長
(株)大日電子 代表取締役社長
枚本 日出夫氏

cJAXA/SOHLA 提供

2002年12月、「苦しい時こそ夢を持たなアカン！」と、東大阪の中小企業の職人集団が立ち上げました。「中小企業の技術力を結集して、人工衛星を打ち上げよう」と設立されたのが、東大阪宇宙開発協同組合（Astro Technology SOHLA）。

「夢を打ち上げるんやない。夢で打ち上げるんや」

本年、1月23日、打ち上げは見事成功し、宇宙で「まいど！」と元気に活躍してほしいとの関係者の願いを込め、「まいど1号」と名づけられました。そのプロジェクトの中で、大阪大学と雷観測装置の開発を受け持たれたのが、吹田市江の木町に本社をおく(株)大日電子の枚本（すぎもと）社長。

5月25日の同組合総会では、理事長に選任されました。そこで、あらためてインタビューをお願いいたしました。

— 開発当初のことについて少しお話いただけますか。

枚本社長『当初の1年間、多いときで週3回の勉強会がありました。その中で、宇宙航空研究開発機構（JAXA）から講義を受けたのですが、当初は専門用語などがわからず、「絵本で話すように」教えてほしいという要望を出しました。』

— 宇宙で使う装置ということで、どんなご苦労がありましたか。

枚本社長『宇宙環境に耐える装置とは』ということで、JAXAから4つの目標を提示されました。真空・温度・振動・放射線の4つです。うで木と呼ばれるブームは真空状態では、可動部の部分で癒着してしまうこと。温度はマイナス150℃に耐えられること、打上げの強烈な振

動に耐えられることなど、課題は山ほどありました。』
— 雷観測装置とはどういうものですか。

枚本社長『大阪大学と共同開発するもので、通常、雷を私たちが目にするのは雲の下の稲光ですが、実は雲の上にも雷のジェットが出ています。その雷の電磁波をセンサーが検出して地上に知らせるという仕組みです。地上での観測は従来から行われていたのですが、広帯域での検出は世界初となります。この成果が認められ、新たに国際宇宙ステーションへの納品が決定しました。』

— 今回のプロジェクトを通して、御社にプラスになったと思われることを教えてください。

枚本社長『私の会社は社員数18人の中小企業ですが、「前向きや」ということで、大企業から私たちの技術力を認めていただけるようになりました。入社2年目の社員も開発に携わったということで、雑誌取材を受け、プロとしての意識を自覚するようになりました。』

— ありがとうございます。未知の世界への長年のお取り組みが、多くの副産物とともに業績へのプラス効果を生んでおられるんですね。

(株)大日電子は、本年4月、経済産業省中小企業庁の「明日の日本を支える元気なモノ作り中小企業300社」にも選ばれました。今後、益々のご活躍を期待しましょう。



(株)大日電子社屋